

松 山 大 学 論 集
第24巻第4 - 2号抜刷
2012年10月発行

大坂貨幣司の研究

安 国 良 一

大坂貨幣司の研究

安 国 良 一

は じ め に

貨幣司は、慶応4年（明治元、1868）閏4月21日の新政府の官制改正において、財政をつかさどる会計官のなかに設置された貨幣発行機関である。江戸（東京）と大坂に鑄造所を設け、翌明治2年2月5日に廃止されるまで、1年足らずのあいだ旧幕時代の貨幣を鑄造した。本格的研究は乏しいものの、これまでの貨幣司についての評価は、明治初期の国家財政を維持するため旧貨幣を鑄造した過渡的組織との認識が一般的であろう。太政官札の発行とともに、質の劣る貨幣を鑄造して、かろうじて国家財政の危機をしのいだという財政史的评价が定着している。

これに対し本稿は、大坂の貨幣司を対象に、具体的に貨幣鑄造や経営の実態に立ち入って、明治初期貨幣史のなかに位置付けることを目的としている。大坂の貨幣司を取り上げたのには理由がある。東西における鑄造には始まった事情に違いがあり、江戸のそれが大総督府のもとで旧金銀座を再編成して実施されたのに対し、大坂における鑄造は京都の新政府のもとで急場の貨幣需要を満たす目的で新規に開始された。金座・銀座の旧称が依然として使われた江戸に対し、大坂こそが貨幣司の鑄造所であった。新国家にふさわしい貨幣鑄造を理想として掲げながら、財政難という現実とのはざまで選択肢は限られていた。

ここでは、地金の調達に注目したい。先行研究は、生糸貿易の利益を中国金や洋銀の買入に充てたほか、大坂の町民から集めた古金銀が地金に用いられ、紙幣で買い上げた場合は政府の丸儲けであったと述べる¹⁾。そうした事実の検証

を行うと同時に、地金の調達という観点から維新貨幣史を再構成したい。なお本稿で利用する史料の大半は、早稲田大学所蔵の大隈文書・中御門文書のなかの貨幣司関係書類である。大隈文書については早稲田大学図書館の画像情報によった。両文書の引用については、大隈・中御門とその番号を示した。

1. 大坂貨幣司略史

まず大坂における貨幣役所の成立から廃止にいたる略史を簡単にたどっておこう。

新政府は、4月江戸占領後に金銀座の貨幣鑄造を禁止し、用具等を大坂に送り、同地で政府自らが新貨鑄造に乗り出す方針であったが、軍資金捻出のため江戸の大総督府は金銀座における旧貨幣の鑄造を継続した。いっぽう京都を中心とする政府の財政窮乏は深刻で、三岡八郎（のち由利公正）のもと旧貨幣の増鑄と紙幣（太政官札）の発行で急場を凌ぐ方針に転換した。太政官は閏4月19日に金札発行通用を布告し、5月28日には会計官に二分金・一分銀の増鑄を通達した²⁾。京都・大坂では5月9日に丁銀・小玉銀の通用停止、銀目廃止を命じていた。この間、大坂における貨幣鑄造計画は、洋式機械導入による新貨幣構想が機器購入交渉や反射炉設置命令にまで進みながら、5月28日に旧貨幣の増鑄が命じられ大きく変更された。三岡の勧めによって住友が献納した長堀の地に鑄造所を建設し、7月ごろから鑄造を開始した³⁾『近來年代記』は「八月上旬、九之助橋西詰住友家敷にてりっぱ成門立、朱地菊紋ちやうちん立、壱丁四方家屋敷を立のかし職人場と成、日々ニ金銀吹立ニ相成なり」と、稼働後の盛況を伝えている⁴⁾。

貨幣司知事には旧金座役人出身の長岡右京が任ぜられ、6月頃まで江戸在勤とされるが、大坂での鑄造所開設が課題となってからは、京都・大坂で職務に当たった。表1に大坂の貨幣司役人の一覧を掲げた。7月に鉾山司が銅会所を引き継ぎ設立されると、貨幣司の判司事であった梶川徹介・内山介輔が鉾山司に異動したが、これは鉾山司が貨幣司の鉾山掛りが担っていた金銀地金への要

表1 貨幣司役人一覧(付鉾山司役人)

出典	太政官日誌	官員録	官員録	官員録	官員録
年 月	慶応4年5月	明治元年9月	同年10月	同年11, 12月	明治2年1月
貨幣司知事	(江)長岡右京	長岡右京	長岡右京	長岡右京	(坂)長岡右京, (東)足立忠二 郎,(東)鷹取春 朔
准知司事					石坂武兵衛
同判司事	梶川徹介, 内山 介輔, 久世治作, 村田理右衛門, 浅香綱次郎, 上 原十助, 吉田文 蔵, 五十嵐初次 郎	吉田文蔵, 五十 嵐初次郎, 久世 次作, 村田利右 衛門, 浅香綱次 郎, 大西新兵衛, 上原十郎	(頭)吉田文蔵, (並)五十嵐初次 郎, (並)村田利 右衛門, 浅香綱 次郎, 大西新兵 衛, 上原十郎, 神谷頼母, 岡村 猪右衛門	(坂)久世次作, 吉田文蔵, 五十 嵐初次郎, (坂) 村田利右衛門, (坂)浅香綱次 郎, (坂)大西親 兵衛, 神谷頼母, 岡村猪右衛門	吉田文蔵, 五十 嵐初次郎, (坂) 村田利右衛門, (坂)浅香綱次 郎, (坂)大西親 兵衛, 上田十郎, 神谷頼母, 岡村 伊右衛門, 田口 録右衛門, 赤城 十四郎, 山上敬 一郎, 藤田弥太 郎, 橋本金五郎
同書記兼勘定方	大西新兵衛				
鉾山司判司事		梶川徹介, 内山 介輔	(頭)梶川徹介, (頭)内山介輔, (頭)久世治作	梶川徹介, 内山 介輔	(坂)梶川徹介, (坂)内山介輔, 久世治作
同試補				根本慎八郎, 朝 倉静吾	(坂)根本慎八 郎, (坂)朝倉静 吾
東京城在勤 貨幣司知事				足立忠二郎, 鷹 取春朔	

出典：朝倉治彦編『明治初期官員録・職員録集成』1, 2 (柏書房, 1981年)

注：(江)は江戸在勤, (頭)は頭取, (並)は頭取並, (坂)は大坂在勤, (東)は東京在勤
明治元年「東京官員録」(須原屋版)では, 貨幣司知事吉益少進, 同副知事吉益雲松, 金銀座取
締として足立忠次郎・山崎大之進・鷹取春朔・斎藤貞三・橋本金五郎・石坂武兵衛を掲載

求を取り込んで成立したことを示している。7月25日鉾山局への改称の布令
には「山出金銀銅共」と, 金銀も扱うことが明記されている。

大坂で鑄造された二分金のなかには金の品位が劣る劣位二分金があり, 一分
銀も安政一分銀の形式を採用しながら亜鉛を含む亜鉛差一分銀とも呼ばれる銀
の品位が悪いものであった。鑄造高については『法規分類大全』による集計値

が利用されている。用途については、東京の鑄貨が軍資金に用いられたのに対し、大坂の鑄貨は紙幣とともに一般財源として使用されたとされている⁵⁾。

明治2年になると劣悪な貨幣の流通が外交上の問題となり、それが悪貨の鑄造停止＝貨幣司廃止へとつながった。2月6日貨幣司知事長岡右京の逮捕に始まる疑獄事件（長岡右京一件）は、表面上は贈収賄容疑に関わるものであったが、新政府の急場の財政問題を凌ぐべく登用された長岡右京や旧金銀座関係者を見限る政治的決断が背景にあった。そしてこれを機会に太政官の下に造幣局を設けるという改組が行われ、新貨幣制度確立にむけて政府が動き出した⁶⁾。

2. 大坂貨幣司の貨幣鑄造

(1) 吹元請払勘定

大坂貨幣司の資金の流れは、決算簿の一つである「吹元請払勘定書付」（大隈イ14A2122/1）によって明らかになる。これは、貨幣司廃止後の明治2年2月に元貨幣司判事の久世治作・村田理右衛門・大西親兵衛が提出したもので、慶応4年7月から翌年2月の稼働期間中の吹元代価の収支をまとめている。表2にこれを示した。

まず収入は、吹元買上代として出納司から167万2,753両を正金・洋銀・紙幣（太政官札）で受け取っている。うち唐金銀の買入を請負っていた岡田平蔵が別口で受け取った4万両が含まれるが、大部分は出納司から貨幣司に直接渡されたもので、正金と紙幣との比率はおよそ2対1である。

支払項目では、金銀目并古金銀類吹元買上代75万7,230両余が最大の費目である。金銀目とは重量単位で取引される金銀地金のことで、古金銀類とは旧幕府時代に発行された金銀貨幣を指している。買上代として実際に使われたのは、正金が68万6,449両で最も多く、洋銀は全額使われ、紙幣は5万6,231両と受取額の一割程度にすぎない。

この買上代が出納司から受け取った吹元代の半額にも達しないのに対し、地金の買入を請負った一部の商人に買入資金が前貸しされ、その未納残高が多額

表2 大坂貨幣司の吹元請払勘定

	金額（両）	貨幣の種類別	摘 要
入方			
	1,632,753	正金・紙幣・洋銀	吹元買上代，出納司より請取
	30,000	正金	唐金銀買入代，岡田平造渡，出納司より請取
	10,000	紙幣	東京にて岡田平造渡，貨幣司へ請取
≠	1,672,753		
払方			
	757,230	正金・紙幣・洋銀	金銀目并古金銀類吹元買上代
	364,177	正金・紙幣	唐金銀買入元，岡田平造渡，未納分
	130,993	紙幣	唐金銀買入元，中島定次郎渡，未納分
	12,919	紙幣	古金銀引替元，清水磯吉渡，未納分
	130,000	正金・紙幣	金銀目手附，英オールト渡
	7,400	正金	川崎器械場鉄柱・器械買入，ガラバ渡
	15,800	紙幣	丁銀鉸り銅引当，2口
	34,326	正金	荒銅買上代，ガラバ渡
	11,174	紙幣	丁銀灰吹手間，3口
	78,448	正金	二分金・一分銀吹方諸入用
	5,390	正金	附属并下役以下手当金
≠	1,547,860		

出典：「吹元請払勘定書付」（大隈イ 14A2122/1）

注：1両未満切り捨て

に上っている。詳しくは後述するが，唐金銀（中国産金銀）買い集めを請負う岡田平蔵に36万4,000両余，同じく中島定次郎には13万両余，古金銀の買い集めをする清水磯吉には1万3,000両弱の未納が生じ，外国金銀輸入を請負ったイギリスのオールト（商会）には13万両の手付が支払われていた。こうした未納額は総額65万両にもおよび，項目の第2位を占め，金銀地金の輸入が継続して行われていたさなか，貨幣司の廃止が突然であったことを推測させる。

ガラバ（グラバー商会）に発注していた川崎新貨幣局（のちの造幣局）の建設や器械設備の費用も，正金で7,400両計上されている。後述するように同局建設費用は大半が出納司から別途支出されているので，ここに計上されているのはその一部にすぎない。外国商人に手付金として正金を支払ったのでこの勘定に入っていると思われる。

品位の異なる旧丁銀は南蛮吹にかけて銀と銅に分け、さらに鉛に含ませた銀は灰吹にかけて精製するという工程を経て、銅（丁銀鉸り銅）と銀（灰吹銀）の純良な地金を得る。この鉸り銅の代価が貨幣司の金幣掛り役と灰吹業者灰吹屋藤三や近江屋猶之助に紙幣で支払われている。このほか銅については、ガラバからも荒銅 15 万 3,752 斤余が正金で買い付けられている。その単価は 100 斤あたり 22 両余で、金幣掛り役分の同 32 両余、両灰吹業者分の同 15 両余とずいぶん開きがある。ふつう荒銅は鉸り銅より品位は劣り、単価も低いが、ここで格差が生じた理由は定かでない。いずれにしても銅については精錬の手間賃としてではなく、地金代価として支払われている。いっぽう灰吹については手間賃として、灰吹屋・近江屋、金幣方、岡田平蔵・中島定次郎の各組に銀 10 貫目あたり金 5 両の割合で紙幣で支払われている。銀の精錬については、銅の場合と違って彼らはその工賃を取得するにすぎなかった。銀は貨幣司の所有物として、その管理下で精錬されたのである。

最後に貨幣鑄造費用 7 万 8,448 両余や下級役人に対する手当金 5,390 両が計上されている。吹方諸入用の額は貨幣の種類毎に異なっており、二分金では 9 月鑄造分までが鑄造高 1,000 両につき金 34 両、10 月以降鑄造分が同 30 両、一分銀の場合は最初のごく一部が同 50 両、その後は同 30 両で一貫していた。9 月以前に鑄造した二分金 60 万 8,000 両とは劣位二分金と呼ばれる旧二分金より品位の劣る分であり、その後二分金の品位は旧に復するから、吹方入用は鑄造貨幣の品位が低いほど高く、品位が良くなると低下する傾向を読み取ることができる。こうした推測が妥当ならば、一分銀も最初は相当品位の低いものが試験的に鑄造されたのではないかと想像できる。品位が低いほど鑄造者の取り分（利益）が多いという、江戸時代の金銀座と同様のあり方をうかがうことができる。

以上、大坂貨幣司の貨幣鑄造にかかわる資金勘定の内容を見てきた。そこでは、出納司から地金買付のための資金を得て市中から古金銀を買い入れ、あるいは資金を前貸しして外国産地金の買入を特定の業者に請負わせる方法がとら

れた。量的には後者の額が大きく、貨幣司の廃止が突然であったためか、前貸し金の未納が多額に上ったことが判明する。

(2) 新貨吹立勘定

前節の資金勘定とは別に、大坂貨幣司には新貨鑄造に関わる勘定書「式分判壱分銀吹立御勘定書」(大隈イ 14A1689)が存在する。これもまた貨幣司廃止後に元貨幣司判事久世・村田・大西が、慶応4年7月朔日から翌明治2年2月5日までの稼働期間について報告した決算書の一つである。これを表3に示した。

表3 大坂貨幣司の吹立勘定

項 目	種別	金額 (両)	備 考
出納司の請取候古金銀吹元高 市中の買上ヶ候古金銀 同断 合	通貨 紙幣 通貨	1,748,275 56,231 700,999 2,505,506	内14,550両は洋銀19,400枚
内 古金銀現物残 (有高訳書別帳) 残	通貨	101,540 2,403,966	外唐金500本・亜銀114丁(直 段未定, 預り), 唐金2本・ 同銀2本 (神戸預ケ)
出来金		2,523,539	
内訳 250目位式分判 辰7/9-9/晦吹立		608,000	外48貫640目 式分判608,000 両之吹減
200目位同 同10/2-巳2/16吹立		1,138,964	内5,745両余目出来之分, 外 69貫126匁 余 同1,133,219両 之吹減
新壱分銀 辰7/19-巳2/16吹立		776,575	内10,250両余目出来之分, 外 389貫683匁余壱分銀766,325 両之吹減
式分判位仕掛残 此出来		81,827	金目130貫924匁余
壱分銀位仕掛残 此出来		38,456	銀目353貫802匁余
金目58匁5 出目之分 此出来		121	
銀目38貫917匁 出目之分 此出来		4,540	
合		2,648,485	
内 古金銀吹元高 差引 御益		2,403,966 244,519	

出典:「式分判壱分銀吹立御勘定書」(大隈イ 14A1689)

注: 金額1両未満切り捨て, 重量1匁未満切り捨て

この史料によれば、出納司から受け取った古金銀吹元高は通貨174万8,275両余、市中より買上げた古金銀は紙幣5万6,231両余分と通貨70万999両余(うち1万4,550両は洋銀1万9,400枚、洋銀1枚を3分換算)であった。通貨とは金銀貨での授受を指し、紙幣は出納司から資金提供を受け古金銀買付に充当された太政官札のことである。買上高の数字は前節の吹元請払勘定に古金銀買上代として計上された通貨・紙幣額に一致している。吹元請払勘定では吹元買上代として出納司から167万2,753両が渡っていたが、それとは別に吹元となる古金銀174万両余も貨幣司に渡っていたことに注意を要する。

以上の合計250万5,506両余が吹立勘定の入方であり、ここから決算時の古金銀有高10万1,540両余を差し引いた240万3,966両余が新貨鑄造に回された地金高となる。これ以外に値段未定のため算入されず預かりとなっていた唐金500本・亜銀114丁があった。

これらの地金からできた新金高が252万3,539両で、内訳は250目位という劣位の二分判が60万8,000両、万延二分判と同じ200目位の二分判が113万8,964両、一分銀が77万6,575両である⁷⁾。出来金高については、従来知られている『法規分類大全』の数値と比較すると、200目位二分金で5,745両、一分銀で1万250両多くなっている。その差額はいずれも「余目出来之分」と記されるように、鑄造工程における地金の減少(吹減)が予想外に少なく、その遣り繰りによってできた分と考えられる。さらに二分判や一分銀を作るべく調製されながら貨幣にならずに製造途中で残った地金、また古金銀を精錬し直して出た金銀の出目もすべて貨幣換算して、総計264万8,485両余となっている。そしてそこから新貨鑄造に回した吹元高240万3,966両余を差し引いた24万4,519両余が、厳密な意味での新貨鑄造利益と計算された。約1割の利益である。これ以外に、前述した10万両余の古金銀在庫や評価未決の外国金銀が保管されていた。

(3) 新貨幣の鑄造見積

これまでの検討で、大坂貨幣司が二分判と一分銀を鑄造したことは明白になった。当初の目論見がどのようなものであったのか、中御門文書中の見積書によって確かめておこう。

二分判と一分銀のそれぞれについて「新吹立見積書」(中御門、卷子 192-3)と「銀銅貨鑄造ニ付見積書」(同、卷子 34-1)の内容を整理したのが表 4・表 5 である。原史料には重量または代価のみ記された項目があるが、わかりやすいように両方を計算して示している。二分判の場合、金 1 貫目に差銀として 4 貫 681 匁余を加え、鑄造時の吹減を外 5 歩引き(史料では出来金 100 両あたり 8 匁、外 5 歩引きは当該数値を 1.05 で割って算出)と見込み、できた鑄造地

表 4 新二分判鑄造見積書

材料・費目	元 代	摘 要	重量 (匁)
金 1 貫目	2,233両, 永333文 3	44匁位, 134双/1匁	1,000.000
差銀代	546両, 永210文	70双/10匁	4,681.800
吹方諸入用	114両, 永988文 8		
合	2,894両, 永532文 1		5,681.800
出来新二分判	3,382両, 永23文 8	吹減 8 匁/100両	5,411.238
残 (益)	487両, 491文余	144両余/1,000両	

出典：中御門家文書「新吹立見積書」卷子 192-3

注：定量は 0.8 匁、品位は 250 匁位(17.6%)、吹減は外 5 歩引で算出、代価の金銀比価は 1 両=60 匁

表 5 新一分銀鑄造見積書

材料・費目	元 代	摘 要	重量 (匁)
上銀	1,166両 2 分, 永166文66	7 匁/匁	10,000.00
銅	1 両 1 分, 永208文33	60目/貫目	1,458.33
鈔鈔	2 分, 永72文91	30目/貫目	1,145.83
諸入用	39両, 永45文52		
合	1,207両 2 分, 243文43		12,604.16
吹減 5 歩引			630.20
残			11,973.96
此一分銀	1,301両 2 分, (17文39)		
残 (益)	93両 3 分, 永23文96	72両余/1,000両	

出典：中御門家文書「銀銅貨鑄造ニ付見積書」卷子 34-1

注：定量は 2.3 匁、品位は 79.34%

金5貫411匁余から二分判3,382両余を作る。費用は金代2,233両余、差銀代546両余に鑄造費用114両余を加えて2,894両余となり、できた二分判から費用を差し引いた487両余が鑄造益となる。利益率は約16.8%である。ここから計算される品位は250目位(17.6%)、1枚の重量は8分(3g)であり、代価計算上は金1両=銀60匁で換算されている。250目位は7月から9月まで実際に鑄造された二分判の品位であり、鑄造費も前述の吹元請払勘定の項で示した出来金1,000両あたり34両にほぼ合致する。

その後10月からは200目位(22%)に品位を上げたものが鑄造されたが、その見積書は伝わっていない。上記の例を参考に推計すると、金1貫目に差銀3貫545匁余を加えて地金を造り、吹減は前掲「式分判壱分銀吹立御勘定書」における200目位の出来金100両あたり6.1匁を採用し、これを差し引いた地金4貫378匁余から二分判2,736両2分余ができる。鑄造費を吹元請払勘定の項と同様に出来金1,000両あたり30両とすると82両余、銀代は357両余なので、益金は67両程度にすぎない。利益率はわずか約2.4%である。

次に一分銀については、上銀10貫目に銅1貫458匁余と鉋鉋(亜鉛)1貫145匁余を合わせ、内5歩の吹減を引いて11貫973匁余の地金から1,301両2分の一分銀を得ると計算している。1枚当たりの定量は2.3匁、品位は79.34%であった。材料費は上銀が1,166両2分余、銅が1両1分余、鉋鉋が2分余、諸入用39両余との合計を1,301両2分から差し引いて93両3分余が益金となる。利益率は約7.8%である。この場合の諸入用も吹元請払勘定の項で示した出来金1,000両あたり30両の数値にほぼ合致している。

これまで貨幣司一分銀については規定の品位はわかっておらず、現物の多数検査によって成分比が判明するにすぎなかった。上記の見積書による成分比はこれに近似しており、この仕様に基づいて鑄造されたことは間違いないだろう。

3. 金銀地金の調達方法

(1) 市中からの買上

「辰七月ゝ巳二月迄 市中ゝ買上候古金銀口々調書」(大隈イ 14A2122/2)は、大坂貨幣司が買い上げた金銀地金の調書で、貨幣司廃止後に元貨幣司の役人が提出したものである。金銀以外に、一分銀の材料となる吹銅 48 貫目(代金 103 両)や針鋸 3,360 貫目(代金 1,681 両)を含むが、買上高全体から見ればわずかな量に過ぎない。

記載様式は、納めた人物や団体名、買い上げた地金の種別と数量、その代金(両・永)、支払が正金か紙幣かの区分が記されている。秤量銀貨を含む地金の場合は重量単位で示され、金貨単位の古金銀の場合は両・分、大判・五両判は枚、外国金銀においては挺や本(延べ棒であろう)の単位も使われている。地金の種別は史料の前半部は細かく記載されているが、後半部では旧貨幣にあたる古金・古銀について「古金口々」「古銀口々」とまとめて記載され、詳細は不明となる。買上げの日付は記されていないが、後述する明治元年 12 月 15 日に契約した英国オールト商会からの買付がこの帳面のかなり後の方にしか登場しないことから見て、全体の記載は日付順ではないかと推測している。

全買上高は、代金換算で正金 68 万 6,449 両、紙幣 5 万 6,231 両(いずれも両未満切捨て)、洋銀 1 万 9,400 枚である。洋銀を含めた総額は 75 万 7,230 両におよぶ。このうち紙幣による買上は比較的早い時期に偏っており、正金による買上が途中から拡大し、帳面の後半部はすべて正金が占めるようになる。これは、貨幣司による鑄造が軌道に乗るまで、資金となる正金が不足していたので、買上ははじめ紙幣にたよらざるをえなかったためと推測される。この地金の不足した時期に劣位の二分金が鑄造されたのであり、地金が多く集まるようになって万延二分金同様に品位を上げたと解釈できる。

買上高 100 両以上の納入者を集計したのが表 6 である。連名で納入する者もあり、必ずしも個人別に集計できないが、連名のうち万屋忠兵衛・木屋次兵衛・

表6 納入別地金買上高

名 前	代金 (両)	備 考
岡田平造	221,170	含連名2件, 他に洋銀13,985枚 銀座下買
灰吹屋藤三	116,909	
ガラバ商会	112,599	営繕司関係者
中島定次郎	52,300	
ヲールト	43,120	
大黒屋六助・正田屋定次郎	23,871	
岩崎半右衛門	22,977	
清水磯吉	22,145	
運上所	22,080	
近江屋九郎三郎	18,481	
和泉屋徳兵衛	13,938	
万屋忠兵衛・木屋次兵衛	7,025	
新屋三郎兵衛	6,688	金銀下買
平野屋幸兵衛	6,312	
芋屋市右衛門	5,722	
長崎商会	4,856	
最上屋善兵衛	3,690	
三村屋寅助	3,468	
上原屋弥市	3,175	
池田屋長兵衛	2,850	
播磨屋藤助・上原屋弥市	2,700	
小沢松之助	2,681	両替商
万屋次兵衛	2,565	
万屋吉之助・上原屋弥市	2,535	
近江屋猶之助	2,404	
中村屋藤兵衛	2,403	
平野屋勘兵衛	2,158	
榎本六助	2,112	
三村屋伝兵衛	1,607	
久世治作	1,606	
万屋忠兵衛・上原屋弥市	1,544	のち大阪通商会社頭取 貨幣判司事
中村屋藤助	1,458	
近江屋久次郎	1,078	
丹後屋与兵衛	1,000	
近江屋清兵衛	947	
高島屋佐七	699	
富田屋宗助	606	
大文字や理兵衛	499	
亀八郎	439	
河邊嘉祐	419	貨幣判司事
浅香綱次郎	249	
綿屋安兵衛	161	
大西親兵衛	119	
木屋次兵衛	118	
播磨屋藤助	100	

出典：「辰七月己巳二月迄 市中の買上候古金銀口々調書」(大隈イ14A2122/2)

注：買上高100両未満の16件省略, 金額の1両未満切り捨て

下線は重複する名前, 表から外れた貨幣司知事長岡右京は84両

上原屋弥市・播磨屋藤助は複数回登場し、いずれも1,000両以上を売り上げた
と推定される。

注目されるのは、久世治作・浅香綱次郎・大西親兵衛など貨幣司の役人の名
前であり、表にはあらわれないが、貨幣司知事長岡右京も84両余を売上げて
いる。このほか長岡右京一件の関係者では、営繕司出入の清水磯吉が多額を納
めている。彼らはいずれも主に古金銀を買い集め、とくに清水は前述のように
引替のための前貸しを受けていた。他の商人や商会と同列に記載された彼ら
は、官吏としてではなく、買い集め商人として登場しているのであり、売上に
よって口銭を稼いでいたのではないと思われる。

大口納入者のうち、灰吹屋藤三はその屋号が示す通り、灰吹銀を大量に売り
上げ、その量は807貫目余と他を圧倒している。岡田平蔵・ガラバ商会・オー
ルト（商会）は、主に唐金銀や亜銀などの輸入金銀を扱い、中島定次郎は「古
金口々」が大半を占める。長崎商会も沓銀・唐金といった中国からの輸入金銀
を扱っている。

買上地金の種類別に納高・価格を一覧したものが表7である。前述のように
旧貨幣である古金銀は「口々」とあって種別がわからない例が多いので、古金
銀についてはあくまで買上量の一部を示すにすぎないが、表の上半に掲げた地
金についてはほぼ全貌を示している。地金と古金銀との割合は金額ベースで4
対1程度で、地金の比重が高く、さらに国内産と外国産の地金の割合は、金で
は1対2、銀ではほぼ1対1.2であり、輸入金銀が大きな割合を示す。すなわ
ち貨幣司における金銀地金の調達では、国内における古金銀や地金の買上より、
岡田平蔵・ガラバ商会・オルト（商会）ら特定の業者を通じた外国産の
地金の買上が大きな比重を占めていたことが判明する。

買上価格について見ると、金地金1匁は通用金2両程度、上銀（灰吹銀）1
貫目は通用金116両余である。通用金は当時一般に流通した万延二分判を基準
貨幣とする価値尺度である⁸⁾。ここで詳しく述べる余裕はないが、古金銀の価格
も上記の地金買取価格を金・銀の純分比率に応じて案分し、さらに改鑄経費を

表7 種類別地金買上高

種 類	納 高	価 格 (両)			
		単位	平均	最低	最高
金目	50貫367匁	1匁当たり	2.058	1.409	2.143
金棒 (本)	112本 (11貫333匁)	1本当たり	208.25		
唐金 (重量)	62貫664匁	1匁当たり	1.959	1.767	2.051
唐金 (本)	126本 (12貫335匁)	1本当たり	191.778	186	200
唐金 (挺)	174挺 (17貫121匁)	1挺当たり	192.759	180	195
亜金目	106匁	1匁当たり	1.8		
上銀 (灰吹銀)	989貫46匁	1貫目当たり	116.617	113.333	116.667
唐銀 (重量)	242貫876匁	1貫目当たり	114.639	111.667	114.844
沓銀 (挺)	4挺 (2貫余)	1挺当たり	57.653	54.605	58.669
亜銀 (重量)	94貫880目	1貫目当たり	130.859		
亜銀 (挺)	87挺 (827貫余)	1挺当たり	1244.047	1237.19	1251.062
享保大判	1枚	1枚当たり	78.25		
五両判	10枚	1枚当たり	17.11875		
新大判	9枚	1枚当たり	26.5625		
元文金	6両	1両当たり	5.28625		
文政金	1,616両	1両当たり	4.6		
草字二分判	100両	1両当たり	4.045		
天保金	3,341両	1両当たり	3.9656		
天保二朱金	2,521両1分2朱	1両当たり	2.601875		
安政金	1分	1両当たり	3.1724		
安政二分判	2,146両	1両当たり	1.611875		
丁銀 (元文銀)	19貫472匁	1貫目当たり	50.96		
文政銀	1貫500目	1貫目当たり	39.75		
天保銀	24貫949匁	1貫目当たり	28.625		
安政銀	112貫974匁	1貫目当たり	12.9375		
天保一分銀	14,987両1分	1両当たり	1.07		
焼金銀 (二分判・二朱金・一分銀)	640両1分 (660両3分余)	1両当たり	0.92		
鈷鋳	3,360貫目	1貫目当たり	0.5		
吹銅	48貫目	100斤当たり	34.5		

出典：「辰七月己巳二月迄 市中の買上候古金銀口々調書」(大隈イ14A2122/2)

注：納高の括弧内は参考重量

差し引いた価格となっているようだ。ただ注意を要するのは、古金銀の比価は江戸期の金1両≒銀60匁とは大きく懸隔していることである。計算すれば、元文金1両≒元文銀103匁、文政金1両≒文政銀115匁、天保金1両≒天保銀138匁、安政金1両≒安政銀245匁となり、銀価下落が大きい。これが開港後

の金銀比価の海外水準への移行に起因していることはもちろんである。もう一つ天保一分銀に注目したい。その価格は4個1両が通用金1両余であり、価値尺度となる1両が天保期に比し大きく下落しているのに名目価格は変わっていない。これも同じく銀価下落の影響で、天保一分銀4個の地金価値がほぼ通用金1両なのである。

(2) 貨幣材としての国内産銀

つぎに貨幣材料に占める国内鉱山から産出される地金の比重を検討しておこう。前述のように、慶応4年7月に国内鉱山から産出される金銀銅は大坂の鉱山司が扱うことになった。以下の記述は、鉱山司提出の「明治元辰年 金銀銅請払御勘定帳」(大隈イ14A2121/1)と「辰年中御勘定出納高内訳帳」(大隈イ14A2121/2)による。

明治元年に鉱山司から出納司へ納めた貨幣材は、まず灰吹銀が重量234貫170匁余、金額にして2万5,182両余(1貫目単価107両54)であり、純銅はわずか712斤5匁、金額にして228両(100斤単価32両)であった。金は完無である。同年中に鉱山司が買い入れた銅は300万斤に近いので、銅の方は全体量から見て微々たる量にすぎない。いっぽう灰吹銀の買入高は236貫254匁余で、内訳は飛騨高山銀124貫982匁余、但馬生野銀79貫757匁余、越前大野銀29貫431匁余、荒銅からの鉸銅2貫972匁余、市中小買上が2貫84匁余である。金額で2万5,412両ほどなので、買入平均値段も出納司納め値段とほぼ同額である。鉱山司では買入高のほとんどすべてを出納司へ納め貨幣材料に回したことがわかる。

明治2年になると詳細はわからないが、貨幣司廃止直後2月15日までに灰吹銀は金額にして3,400両分が鉱山司より出納司へ納められている。単価に変更がないとすると31貫616匁余が貨幣材料に回されたと計算できる。したがって貨幣司廃止まで鉱山司から納めた貨幣材としての灰吹銀は265貫目余にすぎず、市中買上灰吹銀高の約4分の1であった。大坂の鉱山司において調達でき

る国内産銀はせいぜいこの程度だったことを示している。

いっぽう鉱山司において金地金の取扱はなく、いまだ新政府の支配が全国に浸透せず、鉱山行政が未確立な段階にあって、鉱山司は地金集荷を果たせなかったことを示している。銅座・銅会所を改組した鉱山司だけに、銅の集荷量は多いが、貨幣材としての銅は鉱山司にたよることなく、貨幣司が買い上げる量で十分まかなえたと判断できよう。

(3) 出納司と貨幣司との関係

大坂貨幣司は出納司から地金やその買付資金の提供を受けていた。そこで、財政全体における鑄造部局である貨幣司の位置づけを明らかにするために、大坂出納司作成の「辰年中大阪取排出納概略」(大隈イ 14A3290) および「当巳年正月より同九月迄出納算計帳」(大隈イ 14A3339) によって、明治元年と同2年9月までの大坂出納司の勘定における貨幣司との資金の授受を検討しておく。

大坂出納司の請取勘定のなかで最大のものは京都からの廻金 342 万両余であり、それに次ぐ規模で新金上納 219 万 9,000 両、会計起立金と呼ばれた調達金は 92 万両あまりであった。もちろん新金上納は貨幣司からのものである。

いっぽう出納司から貨幣司渡となった費目・金額は、住友が献納した地に建設した長堀貨幣局普請入用が 3 万 5,334 両余、天満川崎の新貨幣局普請入用 15 万 5,000 両、貨幣器械代 1 万 3,500 両と洋銀 5 万枚、貨幣財代 216 万 7,051 両余・洋銀 2 万 7,500 枚・銭 5 貫文余、さらに新金で貨幣財買上代と役所手当諸入用が 101 万 1,400 両であった。ついで翌明治 2 年 9 月までに、東堀(長堀)貨幣司建増し普請入用 1,642 両余、川崎器械所普請入用 3 万両、貨幣財買上代 4,837 両余、貨幣吹元用 22 万 9,000 両が貨幣司に渡った。貨幣材料の買上代や貨幣財そのもの、さらに貨幣鑄造所の建設費用やその設備器械の整備費用が出納司から貨幣司関係費目として支出されていた。

ところで貨幣材料調達の経路は貨幣司による買上ばかりではなかった。それ

は、明治2年貨幣司廃止後に出納司に返納された諸項目から推測することができる。諸向返納のなかには、貨幣司廃止にともなう貨幣材料1,338両余や勘定残金（岡田平蔵・中島定次郎・英人オールトへの貸金を含む）25万4,273両余があつて多額を占めるが、それ以外に大坂十人両替に古金銀引替元として渡した残金3万1,031両余、堺県古金銀引替元残金1,577両余、長崎県貨幣財取集残（洋銀含め）6,760両余が見られる。地域毎にこれらの引替が進捗していれば、古金銀は大坂の出納司に納められ、それがまた貨幣司に貨幣材料として供給される経路を読み取ることができよう。推測すれば、出納司から貨幣司が受け取った古金銀吹元高174万8,275両余とは、京都・大坂・堺・長崎など旧幕領都市で引き替えられた古金銀であり、その吹元から铸造された新金銀が出納司に納められ、それが新たな引替元として各地の役所に渡り旧貨が買い上げられる循環がようやくできあがっていたと思われる。

4. 外国産地金の調達

(1) 岡田平蔵・中島定次郎による買入

金銀地金を大量に納めた岡田平蔵・中島定次郎に対しては多額の仕入金が前貸しされ、彼らはその資金をもとに買付にあたっていた。岡田は大坂の売込商で、のち造幣寮に出仕し、東北の鉱山経営にも乗り出す。生糸輸出や地金輸入に関係したこともわかっている⁹⁾。中島も同様に売込商であったと思われるが、実像はよくわかっていない¹⁰⁾。

貨幣司廃止後に前貸金の返納猶予を嘆願する願書において、両名とも「私儀、去辰年七月申外国金銀目買入方御用達被仰付、相勤来候段難有仕合奉存候」（「大坂貿易商中島・岡田兩人ノ御下金調書並関係書類」（大隈イ14A3118）のうち「在产品込歎願書」）のように記しているから、7月長堀貨幣局での铸造開始と時を同じくして、外国金銀目買入方御用達を命じられ、外国産の金銀地金購入にあたっていたのである。ただし中島については前述したように、実際には外国金銀の購入は少なく国内古金銀の調達高が多かった。

両名に対する前貸し勘定の実態について、元貨幣司が明治2年2月に調べた帳簿が「岡田平蔵・中島定次郎振替金勘定書」(大隈イ14A2122/1)である。これによれば、岡田には、慶応4年8月6日から翌明治2年2月16日まで26口、合計で正金44万2,752両・紙幣14万両・洋銀2万3,985枚余が振り替えられ、うち納高として正金20万4,265両・紙幣1万4,309両・洋銀2万3,585枚余分が戻入され、残額として正金23万8,487両・紙幣12万5,690両余の合計36万両余の前掲額が不納となっていた。中島には同じく、慶応4年8月7日から翌年2月3日まで10口、正金3万1,000両と紙幣19万4,000両が振り替えられ、9万4,006両余分が戻入され、前掲13万993両余が不納として残った。振替金の名目は外国金銀目買入手付あるいは単に金銀目買入元として渡されたのであるが、なかには生糸買入の元金の名義で渡された分(岡田1口1万両、中島2口2万7,000両)もあった。

彼らは貨幣司から前貸金を得て金銀地金の買い集めだけを行ったように見えるが、もう一方で商品を取引する中で、その代価として地金や正金を得ることをめざしていたようだ。「大坂貿易商中島・岡田兩人ノ御下金調書並関係書類」(前掲)は当事者兩人から提出された届書の綴りであり、明治2年2月に貨幣司からの資金が凍結されたことによって、彼らが抱えるさまざまな在庫の実情を明らかにしてくれる。

中島の場合、前貸金紙幣19万4,000両のうち15万6,156両余を惣仕払高としつつ、茶売払代2,615両余を紙幣で受け取り、いっぽうで買上品売払代として正金4万2,227両余を計上しているから、商品を主に紙幣で調達し、売却代をできるだけ正金で回収し貨幣司に上納するというやり方をとっていたことが想定できる。まだ輸送中で着荷しない商品もあり、国元仕入金に回した分や商品相場が下落してすぐに売えば損金が出る分もあるので、6月まで返納を猶予してほしいと歎願している。2月18日付の中島「在品取調書付」によれば、生糸66箇、茶203箇と9箱、酒870駄、米4,578俵、合計4万8,505両余分を商品在庫として持っていた。同月付「別紙在品調書」では、生糸91箇、酒

820 駄、米 4,578 俵、木綿 3 万 8,464 反と品名や数量に少し変化が見られ、代金上納か現品納めとするか伺っている。

岡田の場合は、金属貨幣と紙幣を区分して勘定している。前者では、わずかな銭と洋銀 2 万 3,985 枚と金 43 万 2,752 両を受け入れ、紙幣で買い付けた品物の売り立て代金 7 万 5,407 両余や奥州糸売却代の利益とも 3,251 両余を加えて、そこから貨幣司上納分等洋銀 2 万 3,985 枚と金 48 万 7,294 両を差し引き、金 2 万 4,116 両余が未納分となっていた。内容は生糸代と奥州仕入元へ送った分である。紙幣の項では、貨幣司からの下げ渡し高 15 万両のうち商品買付の支払高 10 万 1,394 両余と京で売却し上納した糸代 4,302 両余を差し引き、4 万 4,303 両余が未納であった。酒・生糸・茶・油の残品代と信濃・飛騨の仕入元へ送った手当金である。これに附属する「残品払立并二国々仕入元渡金二付伺候書付」によれば、信州へは真綿の買付代 1 万両、飛騨へは銅仕入のため 2 万 2,633 両を送っていたことが判明する。

彼らは地金の買付を行い、さらに商社活動をつうじて商品売却代の正金銀での回収に努めていたといえる。外国からの地金取得をめざしたため、扱う商品としては生糸・茶など輸出品が多く、予告なく貨幣司が廃止されたことによって、抱える在庫品や現地に送った多額の仕入金について、とりあえず上納の猶予を願うしかなかった。

(2) オールト商会による輸入

明治元年 12 月 15 日（1869 年 1 月 27 日）に大坂の貨幣局と収納司（出納司のことか）は政府御用の金銀塊・銅の輸入について英オールト商会¹¹⁾との間で契約を締結した（大隈イ 14A 1686）。和訳文によれば、日本側は貨幣局印鑑と長岡右京・久世治作・桐山辰治郎の署名があり（桐山は不在無印）、イギリスはコンシュールの印鑑がある。長岡は貨幣司の知司事、久世は同判司事、桐山は出納司の大坂在勤の知司事であった。形式的には日本政府の部局とイギリス領事との条約というかたちをとっているが、実質はオールトとの契約であっ

た。契約書本文は全11か条で(大隈イ14A1687)、経費や口銭を定めた附属書がついている。以下、主要な箇条を要約して示す(丸数字は条数)。

- ① オールト商会は洋銀40万枚を納め、今後3年間貨幣司御用の貴金属輸入を独占する。貨幣司は金1か月500本以上、銀6万斤以上、銅10万斤以上の注文毎に金高に応じ1~2割の手附金を渡す。
- ② 金銀銅御入用の時はオールト商会が早速輸入する。大坂と買取地での口銭は、金銀は5厘、銅は同じく2歩5厘、その他の経費はオールト商会より渡し、勘定に入れる時は附属A印書類の通りとする。多額になるときはその時提出する勘定書面に載せる。
- ③ 金銀銅の代価のうちに白糸・茶・その他の産物を渡される時は、オールト商会の手でロンドンおよびその他の所へ利益になるよう積み送る。白糸・茶等につきオールト商会の経費・口銭は、提出する勘定書に載せる。多額になっても附属書B・C印の通りである。蚕印紙の口銭は大坂・売捌の湊にてそれぞれ2歩5厘、蚕紙調子賃口銭は1歩5厘である。オールト商会より積出す白糸・茶については当地積り直段の8割5歩迄の前渡金を払う。蚕印紙については前渡金なし。その他産物は直段積りより8割5歩の前渡金を払う。もしオールト商会へ望の品々があればその時の相場を以て買い請ける。
- ⑤ 日本の役人衆は前受金につき1か月2歩の利足を加え、元銀は和暦5月迄に白糸または茶にて渡す。オールト商会の手でロンドンまたは横浜へ積み送る。大坂または売捌地でのオールト商会の経費・口銭、その他の経費も、附属書B・C印の通りとする。貸附銀高の内として渡された白糸・茶の前渡金は、当地直段積りにて8割5歩を渡し、残りは売捌高を以て役人衆とともに勘定する、銀高の内、茶は4分の1以下、残り4分の3は白糸とする。
- ⑥ 積書の相場については、産物を渡された時の最低値段に別紙の運賃や口銭等を加え、その8割5歩の前渡金を渡す。相場に不同意の時は、双方よ

り白糸や茶の鑑定人を出し決定する。それでも同意しない時は、その兩人が選んだ人を立会わせて決定する。

さらに契約書の本文中に記載された手数料などの取り決めに補足するため、唐金注文の見積書、日本から英国ロンドンへ白糸を輸送し同地で売却する場合の見積書、同じくロンドンへ茶を輸出し売却する見積書が附属している（大隈イ14A3116）。運賃・保管料・保険・手数料などが細かく記され、生糸・茶の代金決済通貨は洋銀となっているが、唐金輸入の場合は一分銀を輸出することになっている点が注目される。

この契約の特徴は、オールト商会在日本側に対し洋銀40万ドルを融資し、それによってオールトは3年間の貴金属輸入の独占を保障され、日本側は外貨資金を得たことである。融資の返済が茶・白糸の輸出販売委託によって行われるとともに、輸入金銀銅の代価としてこれら日本製品の販売委託を行うこともできた。茶や白糸の調達がどのように行われたかは史料からは把握できないが、輸出品販売によって利益を得て資金を迅速に回転させたかったであろう。③⑤⑥に輸出品販売時の前渡金の規定が細かく規定されているのも、こういった事情が背景にある。金銀貨鑄造のため金銀塊を輸入しようとするのであるから、代価として新貨幣の流出は極力控えねばならず、代わってこういった商業活動の成否が貨幣鑄造の順調な展開のカギを握っていた。

契約は明治元年12月に締結された。すでに岡田・中島による外国金銀買付請負が始まって半年近くがたち、前貸しを受けて買付を行う彼らのやり方では進展は見込めなかったのではなかろうか。海外での販売手段を持たない彼らにとって、結局は外国商人に販売や買付を依存せざるを得なかった。こうしたなかオールト商会在資金提供して金銀塊の輸入を行う新たな方法は、オールトの手数料が大きかったにせよ、大量の貴金属を迅速に輸入することに実効性のあるやり方だと判断されたのであろう。しかし突如として貨幣司は廃止され、発注された注文品の多くはまだその手元には届いていなかった。

「オールトより差出候金銀目覚書訳書」(大隈イ 14A 1692) は貨幣司廃止後の 1869 年 4 月 1 日(明治 2 年 2 月 20 日)における既着および到着予定の金銀銅の高と未払代価の報告である。これによれば、金棒 175 本が神戸着、横浜にて買い入れたカリフォルニア銀棒 93 本も神戸着しており、荒銅 3 万斤は 2 月末に神戸着予定であった。このほかカリフォルニア銀 300 本とカリフォルニア金(量不明)が発注済みで約 1 か月後に神戸着予定、荒銅 12 万斤は 6 月前着予定、ロンドンに発注した金銀はおよそ 2 か月内に到着予定としている。手付金として日本側はすでに 9 万 5,000 両を渡していたが、既着分の残金だけで 1 万 4,300 両と洋銀 12 万 5,237 ドル余が請求され、荒銅 3 万斤代 6,300 両も近いうちに必要だった。「長岡君より格別の頼によりて三四ヶ月の間残り荒銅の到着を延せり」と、資金繰りに困った様子もうかがえる。狙い通りに大量の金銀塊がもたらされたが、同時に日本側は支払いに苦慮することになった。

5. 地金確保から見た維新貨幣史

以上の考察から、大坂貨幣司が地金確保に苦しみながら旧貨鑄造を果たしてきたことが明らかになった。先行研究が言う、生糸貿易の利益を海外からの金銀買入に充てたほか、市中で集めた古金銀が地金に用いられたことが、数字をもって裏付けられた。だが紙幣で直接買い上げた分は 5 万 6,000 両余りと多くはなく、政府における改鑄の利益も多額とは思えない¹²⁾。あくまで紙幣は地金不足の最初期に臨時に使用されたにすぎない。最後に、こうした経緯を新政府の貨幣政策と関連づけて解釈しておきたい。

新貨幣製造のことは慶応 4 年 2 月初めから新政府内で話し合われていたらしい。薩摩藩小松帯刀は日記¹³⁾のなかで、2 月 1 日に外国事務局より下坂命令があり、翌朝大久保利通に会い、その後二条城太政官代へ出勤して「貨幣器械ノ事」「楮幣形ノ事」「外国貨幣ノ事」「金札ノ事」と記し、これらについて意見が交わされたことを示唆している。箇条の最後に「断然御止之事」と注記されているが、これがどこに懸る文言かは判然としない。いずれにしても新政府

上層部で新貨幣製造が構想され、それを巡って議論があつて、小松の大坂下向も器械の発注などと関係した可能性がある。また日付ははっきりしないが、3月から閏4月頃の記事中に、小松が五代友厚から聞いた箇条の中に「金地金一ヶ月千挺ツ、ハ御用ヘクトノ事、永見寛二請合ノ事」とあつて、金地金1か月1,000挺が必要で、それを長崎の商人永見寛二が請け合つたという。この時期まとまった地金を継続的に必要とするのは貨幣鑄造しかありえず、金貨鑄造のための地金を確保しようとしていたのだろう。

新政府は2月23日にこれまで通用停止されていた古金銀について、将来改正の含みを持たせながら、地下相場による通用をいったん許した。いっぽうで密かに貯め置くのを禁止しているから、当面の通貨の量的な確保や貨幣材料として注目していたと判断される。江戸開城4月11日を経た4月24日には、旧幕府の管轄下にあつた「金銀錢製局」すなわち金座・銀座等の保有金銀等を朝廷に接収すると沙汰した。それまで貨幣鑄造に携わってきたのは江戸の金座・銀座であつたから、主に江戸を対象としたものと推測される¹⁴⁾。閏4月14日には太政官布告を以て、古今通用金銀錢の価位を詳細に定め、その定価による通用を促した。別紙には慶長金以下の金貨のそれぞれについて、重量や含有金銀の割合、通用金による換算値が記載され、銅錢についても種類毎に通用文数が書かれている。その内容は『明治史要』附表所収の「新旧貨幣価位表」に相当するが、一般に伝達された別表には秤量銀貨や計数銀貨を載せていないことに注意を要する¹⁵⁾。銀貨について内実を秘匿したのは、いずれ地金として回収することが予定に上っていたのではなかろうか。

だがこの布令によって却って旧貨幣の通用に世間で懸念が生じたようで、同月27日には貨幣交換に打貨の取得を禁じ、旧貨を上納にも使用するよう述べて、御定め通りの通用を命じた。このころまでは旧貨幣について、含有金銀を反映した定価で流通させることを目指していたと判断される。

ところが5月9日にはいわゆる銀目廃止が発令され、丁銀・豆板銀の通用停止、銀名の取引を金銭仕切に改めること、旧銀を「近日御改製之新金銭」で買

い上げることが布告された。銀目廃止の政策意図については、幣制の統一にあったとする見解、金札の流通促進にあったとする見解が闘わされてきた。両見解の当否は暫く措き、ここでは初めて新貨幣の発行が予告され、丁銀・豆板銀の買上が示されていることに注意したい。丁銀等の通用停止とは、貨幣としての価値を認めず、地金とするとの宣言であり、当然地金価格で買い上げられることになる。貨幣司の買上価格に見た通りである。貨幣表の公布、丁銀等の通用停止は、江戸期の貨幣改鑄時にしばしばみられた旧貨の退蔵という現象も排除するものであった。大坂では6月12日頃に古銀（称量銀）の引替値段について商工会所から達があった¹⁶⁾。政府は明らかに古銀を地金として回収しようとしていた。

新貨鑄造の予定を公表しながら、事態はいつこうに進まなかった。却って5月28日には会計官へ通用二分金・一分銀の増鑄が達せられ、政府内で新貨構想はいったん潰えたように思われる。7月25日にはついに新貨鑄造と丁銀等の交換について前言撤回にいたる。「未御改製之場合ニ不立至候間、所持之者ハ先可差出候」と、新貨ができていないのにもかかわらず旧銀の所持者は先に差し出すように命じ、のちに新金銭の下げ渡しを受けてもよいし、困る者は金札を下げ渡すなり、金札で買い上げると布達した。そして8月5日までと期限を切り、員数と希望を会計官に届けるように促した。ここでは、金札との交換を勧めて旧銀回収を急いでいる。また同日付で大坂銅会所を改組した鉾山局が山出しの金銀銅を買い上げる旨の布令が出され、鉾山からの貴金属地金の収納が制度として整えられた。鉾山産出の金銀や荒銅から採取される灰吹銀が急ぎ求められていたのである。

ところで大坂では同文を7月21日に布告し、25日迄に員数などを会計官へ申し出るよう求めていた。大坂で員数調査が行われたことは確かなようで、8月5日付会計官の通達では、「丁銀豆板銀所持高等申立有之分、貨幣司エ差出可申候、尤右代価於同所、即刻御下渡可相成候」と、申告分を貨幣司へ提出するよう命じて代価を即刻下げ渡すと述べていた。鑄造所のある大坂で丁銀等の

買上を急いでいた様子がかがえる。さらに7月29日には古一分銀（天保一分銀）を特別に7分増で買い上げると布達し、8月3日に北浜一丁目の十人兩替詰所に差し出すよう命じている。歩増買上は今回限りと断っているのは小口買上への優遇であろう。実際には貨幣司買上価格は一貫してこの価格であった（表7参照）。比較的流通量が多い古一分銀に目を付け、当面の地金確保のために歩増買上が行われたと推測される。

この時期、地金の買上→新貨鑄造→売出・引替の循環を早期に立ち上げようとして、地金不足のなか貨幣司は質の劣る金銀の鑄造を開始し、買上の代価として金札を使用せざるを得なかったのである。金札と正金の等価流通を謳うのも、地金買上の代価として使用されたことが大きな圧力となっていたと思われる。維新期の貨幣政策は、状況の変化のなかで試行錯誤の歩みを続けていた。

注

- 1) 神長倉真『明治維新財政経済史考』（東邦社、1943年）417～9頁。主に関係者の後日談に依拠した論述であり、一次史料に基づいた分析ではないという限界がある。
- 2) 以下、とくにことわらない限り法令の条文や発布の日付は『法令全書』による。また京都は『京都町触集成』第13巻、大坂は『明治大正大阪市史』法令篇による。
- 3) 拙稿「大坂貨幣司と住友」（『住友史料館報』第43号、2012年）115頁。
- 4) 大阪市史史料第二輯『近來年代記（下）』1980年、139頁。
- 5) 日本銀行調査局編『図録日本の貨幣5』（東洋経済新報社、1973年）154～6頁。
- 6) 長岡右京一件とその意義については、前掲拙稿「大坂貨幣司と住友」127～33頁。
- 7) 金貨の品位は α 匁位と表す。これは純金44匁を全体量 α 匁で除して百分率に換算できる。すなわち250目位は17.6% ($44 \div 250 \times 100$)、200目位は22% ($44 \div 200 \times 100$)となる。
- 8) 山本有造『両から円へ』（ミネルヴァ書房、1994年）第1章「万延二分金考」。
- 9) 岡田平蔵の経歴については、田村貞雄「政商資本成立の一過程—先収会社をめぐる—」（『史流』第9号、1968年）が詳しい。同論文によれば、平蔵は天保6年3月19日江戸日本橋村松町生まれ、本名は村尾銀次郎、父は田中三郎平との説がある。のち日本橋品川町裏河岸の釘銅鉄物問屋伊勢屋岡田平作の養子となり、開港後横浜に設けた出店で売込商として活躍したが、幕府から咎を受け慶応元年横浜店を閉じ、大坂に移り淡路町二丁目に開店した。同3年義父が死去し家を嗣いだが、大坂にとどまり、新政府成立後は由利公正に接近し、その命を受けて生糸その他の物産買付に奔走した。この物産買付は貨幣司が外

国貨幣を獲得するための緊急輸出であったと考えられ、奥州生糸、信州真綿、越前生糸、飛騨銅を買い付け、茶・蚕卵紙・海産物・油蠟などを扱い、洋銀2万3,985枚、正金51万1,410両を政府へ上納した。大坂商人中嶋定次郎との共同で行った事業は、フランスから購入した軍艦や横須賀製鉄所の代価支払のため洋銀を必要としたためであったという。貨幣司廃止後も造幣部局との関係は続き、明治2年に五代友厚とともに大坂今宮に古金銀分析所を設立、同4年に造幣寮分析御用の拝命を出願し、三井組とともに認可され、古金銀の買付と造幣寮への納入を行った。同5年東京に移り、三井組三野村利左衛門とともに辰ノ口分析所の払い下げを受け、東京古金銀分析所を経営した。岡田の事業は古金銀回収を中心に米穀取引、軍需品輸入に広がり、さらに小野組の資金によって東北地方の尾去沢・阿仁・院内など鉱山経営に乗り出した。このうち、井上馨との関係から払い下げを受けた尾去沢銅山について疑獄事件として世間の非難を浴びたことは有名である。

- 12) 中島定次（治）郎は、明治6年に小西善兵衛と共にメリヤス工業を開業（『明治大正大阪市史』第5巻、335頁）、同12年6月18日の証拠金戻入方不整一件（原告東京府深川区稲垣左右衛門）の被告15人のうちに名を連ねている（橋本誠一 HP「大審院民事判決一覧（1875-1880）2」No 511）。
- 11) 契約書ではオールト「商社」と和訳されているが「商会」で統一した。『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿』Ⅱ（長崎県立図書館、2003年）や井上琢智・遠藤トモ・西口忠「大阪在住外国人名簿」（堀田暁生・西口忠共編『大阪川口居留地の研究』思文閣出版、1995年、所収）によると、オールトは長崎と大坂に事務所を構え、明治元年9月まで一家は長崎に居住していた。
- 12) このことは貨幣司関係者が得た利益が多額であったことを排除しない。貨幣司における貨幣鑄造が旧金銀座の人や技術に依拠しなげばならなかったこと、古金銀買い集めに貨幣司役人が関与したことなどから判断すれば、決算簿に表れない利権・利得の存在も十分想像される。
- 13) 鹿児島県史料刊行委員会編『小松帯刀日記』鹿児島県史料集22（鹿児島県立図書館、1981年）。
- 14) 明治2年2月に元貨幣司が作成した「元金座御取揚ニ相成候金銀目并金箔代金之覚」（大隈イ14A1690）によれば、京都金座から焼金1貫890匁余と上銀1貫594匁余（合計代金4,283両余）、江戸金座からは金箔19万枚近く（代金1,845両余）が取り上げられているが、これらは貨幣司を通して売却され代金が出納司に納められた分だけの数値であろう。
- 15) 『明治史要』附表のうち「内国金貨幣表」「内国銀貨幣表」「外国金銀貨幣表」「外国銅銭表」は一般には流布しなかったようだ。江戸の播磨屋中井両替店の「改六拾七番日記」（国文学研究資料館所蔵）には全編が書写されているので、両替商など専門業者には情報が伝わっていた。
- 16) 江戸の播磨屋「改六拾七番日記」（前掲）に、大坂の取引先米喜（米屋喜兵衛か）からの情報として記録されている。価格は表7の貨幣司買上値段に一致している。